

# 史遊会通信

No.248号  
平成27年  
12月5日

編集  
042-754-9360  
arai-hiroshi@  
jcom.home.ne.jp  
新井宏

十一月講演・討論会の講演要旨

## 地政学・ポーランドと韓国

新井 宏

歴史上には、時代や地域が異なっているにもかかわらず、似た現象がしばしば現れる。

例えば、イタリアのルネッサンス期のチェーザレ・ボルジアは、塩野七生が「優雅なる冷酷」と表現したように織田信長そっくりの男であるが、彼の妹、ルクレツァー・ボルジアもお市の方と同じく絶世の美人、相次いで政略結婚をさせられたところまで似ている。そう思ってみるとミラノ公国のイル・モーロは武田信玄、傭兵隊長の反乱は明智光秀であろうか。このように対比してみると、なじみの薄いイタリア史でも何となく判ったよう

な気がする。これが外国の歴史を覚える極意だと思っている。

さて、今回のテーマは、討論会として歴史上の類似性についての事例などを紹介して頂くという趣向であるが、その事例研究として、「地政学」におけるポーランドと韓国の類似性を論ずる。

最近の韓国の右往左往ぶりは、第一次大戦後、百二十五年ぶりにやっと祖国を回復したポーランドがその後、ナチスとソ連を天秤にかけて「均衡者外交」を進めたため、再び国が分割されてしまった歴史と重なる。

### 忘年会のお知らせ

日時 十二月九日(水)

午後五時三十分～八時

会場 コートダジュール銀座コリドー店

中央区銀座七の二の二二

地下鉄「銀座駅」三分

趣向 参加費無料 一時間半程度歓談

その後一時間程度カラオケ大会

一月号自由執筆 三戸岡道夫、中込勝則、

安田保之の諸氏 締切十二月末

### 総会のお知らせ

日時 一月十六日(土) 午後三時～五時

会場 銀座ルノアール八重洲北口会議室

講演 柴田弘武氏

テーマ 未定

絶対に手を握るはずのないナチスとソ連が秘密裏にポーランドの分割を決めたために第二次世界大戦は始まった。

その歴史に学ぶことなく、韓国は「均衡者外交」を気取って、中国に近づき、米国や日本を苛立たせている。

## ポーランドと朝鮮半島の対比



### 一、地政学的なポーランドと朝鮮半島

まず最初に、歴史的に見たポーランドと朝鮮半島の地政学的な類似点を紹介しよう。

(1) 七世紀の朝鮮半島と九世紀のポーランド  
七世紀の朝鮮半島は、唐と新羅によって百済と高句麗が滅ぼされ、半島を新羅が統一し、高句麗の後続国家・渤海が出現した東アジアの大激動時代である。日本では大化改新を経て、倭国から日本国が成立した。一方、九世紀頃のポーランドとバルト諸国は、バルト海沿岸にバイキング、西にはフランク王国、東にはルーシ(古ロシア) 11公国が控えていた。

九世紀のヨーロッパの地図に、七世紀の東アジアの国家を重ねると、現在のバルト三国は朝鮮半島(加耶、百濟、新羅)、ポーランドは高句麗、そしてフランク王国が中国(唐)、ルーシ(古ロシア)が北方民族(契丹、女真)によく対応している。その上、「バイキング」が日本の「倭寇」とそっくりである。その頃、バイキングはフランク王国のブルターニュ地方を占拠し、バルト三国・ポーランドに侵入し、古ロシアまで勢力を伸ばしていた。そもそもロシアの語源はルーシであるが、それはバイキングのことを意味する。

### (2) 現代の朝鮮半島と中央ヨーロッパ

現在、地球上に、長期独裁国家として残っているのは、ポーランドの隣国ベラルーシと朝鮮半島の北朝鮮のみである。

地理的に見ると、北朝鮮の南に韓国、後方に中国があるように、ベラルーシの西にはポーランド、後方にはロシアがある。このような地域に長期独裁政権が残っているは偶然とばかりは言えないのである。

### 二、ポーランドと韓国の歴史

#### (1) ポーランドの歴史

ポーランドは十一世紀には、初期ポーランド王国を形成したが、十三世紀になると、残酷で知られる北方十字軍(ドイツ騎士団)とモ

ンゴルの侵略により国土が荒廃し、モンゴルが去ってからは、空白地にドイツ系移民と十字軍の迫害を逃れてユダヤ人も大勢やってきて、アウシュビッツの惨劇の当事者となってしまった。

しかし、十四世紀末に成立したポーランド・リトアニア連合は、ドイツ騎士団に対して優勢となり、一四一〇年のヨーロッパ中世史上最大の会戦、タンネンベルクの戦いで圧勝した。

その後、十六世紀にはポーランド・リトアニア共和国として、ベラルーシ、ウクライナを含めて、ヨーロッパの最強国に成長する。

一六八三年のオスマン帝国十六万人の軍勢による第二次ウィーン包囲では、ポーランド国王ヤン三世が救援に駆けつけ、オスマン軍を敗走させている。

ただし、ポーランド国王は世襲制でなく、貴族達によって選挙される仕組みであったために、お互いに牽制しあい、外国系の王家からの干渉を招くことが多かった。

これに便乗したのが、ロシアの女帝エカチエリーナ二世とプロイセン王国のフリードリヒ二世、そしてハプスブルグである。これら三強国は、ポーランドを三分割し、最終的に

は一七九五年にポーランド王国を消滅させてしまう。

分割されたポーランドが復活するのは、百二十三年後の第一次世界大戦直後の一九一九年である。大戦中に、ロシア革命によってロマノフ王朝が斃れ、ドイツ帝国も崩壊し、ポーランドに権力の空白が生じたため、アメリカ大統領ウィルソンの提唱により独立を回復することになったのである。いわば、日本の敗戦により、朝鮮が独立を回復したのと状況は似ている。

復活したポーランドは、革命ロシアに対して戦端を開く。これを応援したのが仏や英で、戦況は一進一退であったが、一九二〇年末にはポーランドはベラルーシおよびウクライナの西部を得た。

この頃、ドイツは、巨額な賠償金に苦しみながらも、強国の意識を持ち続けていた。プロイセンはドイツ領でなければならぬ。

敗戦国ドイツは、一九二二年には早くも、伝統的な敵対国のロシア・ソビエトとラバロ条約を結んで、ベルサイユ体制に揺さぶりをかけ、その四年後の一九二六年には、国際連盟の常任理事国入りを果たしている。ドイツを無視してのヨーロッパはなかった。ドイ

ツとソ連の接近は、挟み撃ちとされるポーランドを脅かす。

自ら独立を勝ち得た訳ではなかったポーランドがドイツに対して抱く敵愾心は、韓国民の日本に対する反日感情よりも強かったかも知れない。

その中で、ナチスのドイツが急激に勢力を拡大し、ソビエト連邦も旧ロシアにおとらずポーランドを狙ってくる。地政学的にポーランドは汎ゲルマンのドイツ勢力と共産主義ソビエト勢力の草刈り場であり、またもや、国の存立が脅かされはじめた。

屈曲したポーランドの感情は、徹底的にドイツ嫌いである。さりとて、体制の異なるソビエト連邦はもつと恐ろしい。経済力も付いてきた。さあどうするか。

そこに生まれた政策が「均衡者外交」である。イギリスやフランスを巻き込んで、ソ連とドイツの間の「均衡者」として、その発言権を高めようとの構想であった。

しかし、ポーランドはドイツと組むこともソ連と組むことも、その選択肢になり得なかった。唯一の道は、独立を与えてくれた英、仏、そして米としっかり組むことであったが、台頭するヒットラーへの防衛策として、まず一九三二年にソ連と不可侵条約を結び、ドイ

ツと一九三四年に不可侵条約を結ぶ。そして、ドイツとの接近が「恐るべき幻想」であったことがまもなく判明する。

政治の世界では何が起ころかわからない。歴史的にも思想的にも、最も憎み合っていたナチスのドイツとソ連が突如として不可侵条約をむすぶのである。

かくして、一九三九年九月一日にドイツはポーランドへの侵攻を開始し、それに呼応して半月後には、東からソ連も攻め入り、一ヶ月余でポーランドを制圧し、再びポーランドは分割されてしまった。

## (2) 韓国

なぜ、このようにポーランドの分割問題を取り上げると言えば、それは韓国が同じ歩みをつづけているように見えるからである。

時に清国に付き、時に日本に付き、日清戦争後は、ロシアと日本をふらふらと行き来する行為は、強国に挟まれた小国の運命と言え、ばそれまでであるが、独立国を呈していないかった。しかし、そんな昔のことを言っているも仕方がない。

実は、近年になっても韓国は同じパターンを繰り返している。

二〇〇五年三月に盧武鉉大統領の掲げた「北東アジア均衡者論」すなわち「韓国が中

心になり周囲の強大国と等距離外交を展開する」という構想である。これは明らかに、強国の間にあつて、韓国が政治を主導しようとする意図から出たもので、ポーランドの「均衡外交」と同質のものである。

この構想については、盧武鉉大統領の言動に支離滅裂なところがあつたので、米国も日本もまともに取り合わず無視したが、外交慣例から言えば、米国との同盟破棄宣言にも等しい内容であつた。韓国が世界を自ら泳ぐ行動をとる時、ろくな事はない。

面白いのは、その頃朴槿恵が、この構想を「外交的な孤立を招く」と批判していたことである。

さて、それでは最近の朴槿恵大統領の行動はどうであろうか。慰安婦問題で自縛自縛の朴槿恵は、中国に急接近している。中国語を学んでいて、個人的にも親中国観があるのかも知れないが、いわば朴槿恵の「均衡者外交」なのである。

しかし、外交専門家からは、米中間の等距離外交などという話は、国際政治への理解が足りないことから出た発想で、盧武鉉政権の「北東アジアの均衡者論」と同じく、大学院生レベルの理想主義的思考だと酷評されている。

国際政治の面では「均衡者」という言葉は、大国が強力な軍事力を背景に、国際紛争を調整・仲裁して平和と安定を確保する役割を指す国際政治の用語なのだそうである。

もちろん、輸出依存度の極めて高い韓国経済にあつて、中国は最大のお得意先であるから当然の面もある。それは中国が急成長する過程で、韓国の安価な中級技術が必要としたからであるが、今やその中国は中級技術の面では完全に韓国に追いつき、追い越し、競争相手に変貌しつつある。

韓国は見栄っ張りの国で、目に見える製品技術、上澄み技術には強いが、それを支える基礎技術は今でも日本に依存している。そのため、韓国から中国への輸出品には、日本の高度な技術部品や原材料が大量に含まれている。中国としては、今や韓国を排し、日本と直接組みたい状況になつている。そのため、韓国の得意な分野が中国に次々に侵食され、経済は落ち込む一方である。組むはずのないナチスとソ連が秘密裏に手を握つたように、経済面で韓国を抜きにして中国と日本が手を握るかも知れない。韓国の新聞が自嘲している。「中国市場が二倍に拡大しても韓国に分け前がない」と。それが「地政学」である。

### 三、第二のアチソンライン

朝鮮戦争は米国が一九五一年にアチソンラインを敷き、共産国との防衛ラインから韓国を外し、日本海まで後退させたために始まつた。米国の言うことを聞かない李承晩大統領に手を焼いた結果でもある。しかも李承晩は、北朝鮮よりも対馬侵攻をイメージして乏しい軍を釜山に集結させた。それを見て、北朝鮮は南進を開始したのである。

今や米国は第二のアチソンラインを敷いて、韓国を放り出しても、韓国がベトナムになるだけだと割り切っているかも知れない。特に共和党のトランプのように、韓国防衛はだ乗り論が米国民に大きな影響を与えている。もはや、韓国の中国傾斜は国際問題としてよりも米国の国内問題として重要なのである。

事実、共産国家であるベトナムは今や反中国の代表格であり、韓国がもし中国に近づいても、いずれ第二のベトナムとなり、中国と対立するに決まつている。その逆に、ナチスとソ連が秘密裏に手を握つたように、米国と中国が突然手を握つて韓国をいじめるかも知れない。

「均衡者外交」などという高級な手法は、韓国のように未熟な外交経験国では、怪我の元である。

## 今年感動した本

村上邦治

今年には終戦後七〇年に当たり、太平洋戦争に関する多くの本が出版された。僅か一〇〇年足らずで、しかも多くの資料や証言が残されているにもかかわらず、間違った記述や解釈、さらには確証のない陰謀説が、史実かのように、流布されているのには驚かされる。

その中でも根強いのは、「ルーズベルト大統領は、日本の真珠湾奇襲を事前に知りながら、ハワイ米太平洋艦隊に通知せず、奇襲を成功させて、日本への参戦を米国民に賛同させた」というものである。最近も米国共和党の重鎮であったハミルトン・フィッシュ(『ルーズベルトの開戦責任』二〇一四)や、我が国保守派が常々主張しており、双方から持ち出されているのが面白い。多大な資料からこの陰謀説を発表したロバート・ステイネット(『真珠湾の真実』二〇〇一)は、一時多くの賛同者を得たが、須藤真志(『真珠湾奇襲論争』二〇〇四)により、完璧に否定された。しかし、その後も度々この陰謀説は、両国で蒸し返される。

日本古代史では、『記紀』など文献資料は限られるので、歴史家は、一字一句に至るまで、独自の解釈を施して組み立て、自説を展開する。ところが、現代史では、本人や関係者の日記、回顧録、インタビュー(オーラルヒストリー)があり、近年は外交文書の公開が相次ぎ、余りに膨大に資料が存在することから、何が真実なのか戸惑うことが多い。自説に都合の良い資料は、数多くあり、幾らでも独自説は組み立てられる。ルーズベルト陰謀説がその典型である。現代史では、史実からかけ離れた、興味本位の出版が、後を絶たない。

これらの問題を解決してくれる『昭和史講義』(筒井清忠編 二〇一五 ちくま新書)は、昭和史特に太平洋戦争について研究しようとする者には、基準書として、必読のものと思われる。副題の、「最新研究で見る戦争への道」とあるように、何故昭和の日本が戦争へと向かったのか。失敗の原因はどこにあったのか。その解明の最新研究成果を、一五名の若手研究者が、紹介している。この本は、確実に最新の資料を駆使し、多方面から分析し、歴史の真実に迫ろうとしている。俗説や誤って定説化されたことに対しても、果敢に、根拠を示して、これを正している。四〇才前後の気

鋭の研究者が中心なので、先輩学者に対しても容赦なく、間違いを指摘しているので、読んでいても気持ちが良い。また多数の学者による論文を集成したものであるが、「資料に基づく正確な昭和史」という基本概念が貫かれており、通史としても違和感はない。

また、さらに詳しく知るための参考文献という項目が各章についており、研究書の紹介をしている。しかも文献毎に厳しく評価を下しているの、活用しやすい。

真珠湾の奇襲が成功したのは、山本連合艦隊司令長官の無謀ともいえる奇策、深度一〇メートルでも使用できる新魚雷の開発、機動部隊のハワイまで徹底した無線封止があった。一方、アメリカ側では、最初の攻撃はフィリピンなど南方基地との思い込みと、真珠湾は浅海で魚雷攻撃されるはずはない、との油断以外何物でもなく、ルーズベルト陰謀説が成立しないのは明らかである。

歴史上の多くの陰謀説は、歴史をより面白くさせ、読者を賑わせてきた。これからも「新たな真相」を、追及する出版が、続くことであろう。そのためにも、昭和史においては、この本は欠かせないものである。

『縄文言語からのアプローチ「長髓彦(ながすねひこ)」の実像』進藤治著  
(幻想社刊)

柴田弘武

なんと二十六年前に発刊された本である。

私は「えみし学会」という会に入って、古代蝦夷(エミシ)と言われる人びとの歴史を追究してきた。その中でエミシと呼ばれた人びとはどんな言葉話していたのかに関心があつた。いわゆる大和朝廷側の人とは違う言語を話していたことは、両者の間には訳(おき)通訳)が必要であつた事が史籍にみえていることで明らかである。

ところでその疑問に対する回答を、私はえみし学会の仲間であつた菅原進氏の『エミシのクニの アイヌ語地名解』や、大友幸男氏の『日本のアイヌ語地名』・『江釣子古墳群の謎』、鈴木健氏の『日本語になつた縄文語』などで得る事が出来た。その一端は本通信二二四号の「エミシの聖地 三輪山」で書かせて頂いた。

そこで書いたようにエミシと呼ばれる人達はいわゆる神武東征以前の先住民、即ち縄文人であり、その子孫がエミシであり、さらに

アイヌ民族として現在につながっていることを主張した。即ちアイヌ語を遡ればエミシの言語であり、且つ縄文語になるのである。

神武紀によれば、神武軍は大和に侵入しようとして河内の草(くさ)香(か)に上陸して生駒(いこま)山を目指す。その時先住民である長髓彦軍が抵抗して、神武軍は敗退し、紀伊半島を迂回する作戦に切り変えざるを得なかつた。ところで長髓彦の妹のミカシギヤヒメは神武以前に大和にやつてきていた天神の子のニギハヤヒ(物部氏の祖先)と結婚し、ウマシマデという子どもを設けている。

先の草香は現在の東大阪市の日(ひ)くさ(下)町だとされている。その日下町の南が東石切町で、ここに延喜式の石切(いしきり)つるぎ(ぎ)神社(下社)がある。その祭神はウマシマデとされる。その下社に対してもう少し東の生駒山麓に上社があり、その祭神はニギハヤヒとなっているが、地元では古くから本当の祭神は長髓彦だと伝えてきたという。それは逆賊を祀るのを憚つて、後に神武に従つたニギハヤヒを祭神にすり替えたのだということらしい。ところでこの石切(いしきり)つるぎ(ぎ)神社名は何を意味しているのだろうか? と問うて見事な解を出した(と思える)のが、本書であつた。

結論をいえばアイヌ語で、イは「かの」、シは「大きい」、キリは「足・脚」であり、そのまま長髓彦と和語に翻訳されたのだという。アイヌ語で「キリ」が「足」だということは大友氏も『江釣子古墳群の謎』で述べているが、そこでは「キリ・キリ」は両足を使つて「くるくる回る」であると述べ、「きりきり立て」、「きりきり舞」も意味が通ずると指摘されていてなると納得出来た記憶がある。

本書によれば長髓彦の本拠は「登(と)美(み)」であるが、アイヌ語でト(池・沼)・メ(湧きだし口)と解釈でき、現在の富雄川の上流の白谷付近だという。生駒もアイヌ語のユック・オマー(鹿がそこにいる)という意味で、狩猟を生業とする縄文人の生活の場にふさわしい地名だという。ここでは省略するが、神武が上陸したとされる「草香邑(くさかむら)青雲(あおくも)白方之津(しらかたのつ)」もアイヌ語で解いている。

本書は高校教師である進藤治(一九二六年生)という方が、一九八八年に大阪のある集会で報告したものだという。「知る人ぞ知る」であつたかもしれないが、私は今年始めてこのよ(よ)うな本があることをネットで知り、古本を購入して読む事が出来、大変感銘を受けたのである。

## 今年読んだ本

平山善之

今年は、強大化した中国にどう対応するか論じられることが多かった。隣国であり、歴史的紐帯も強い日本としては、避けて通れぬ課題でもある。今年読んだ中国関係の本から、感動した、というわけでもないが、3冊をあげて見た。

## ① 「アメリカと中国 もたれ合う大国

S・ローチ 日本経済新聞出版社

筆者はモルガン・スタンレーのエコノミスト。香港駐在経験がある。中国に同情的で、為政者を高く評価する。米中両国は経済的には切っても切れない関係にあり、もたれ合いを続けた結果、貿易不均衡は巨額になり、バランス調整は避けられない。中国は生産から消費重視へ、米国は消費から貯蓄重視へと舵を切る必要がある。経済力1, 2位の米中が経済構造を転換しようとしている。転換は決して容易ではなく政治的断絶、相互不信から相互に協力して、というわけにはいかないが、もたれ合いは持続不能なのだから、実現するだろう。筆者は、中国のほうが、転換は早いと考えているようだ。

## ② 「日本人が中国を嫌いになれない

これだけの理由」

瀬口 清之 日経BP社

「なれない」というのは「心底は好き」というのではなく、「なるべきではない、なったら大損だぞ」という意味。

筆者は元日本銀行北京事務所長。「日本のメディアは売らんかな主義で嫌中、反中傾向の記事や中国悲観論で溢れている。しかし、『中国の発展は日本の発展、日本の発展は中国の発展』だ。日本は嫌中、反中に走るべきではない。日中経済の相互依存関係は今後益々強まる。中国経済社会の安定は日本の国益に適う。」と筆者は言う。そして、「中国は猛烈なスピードで変わっている、二〇一〇年以後の中国はそれ以前と違う国だ」、「八〇年代以降に生まれた中国人は、年上の中国人と大きく違う」、「地域的相違も大きい、だから古い、狭い視点で中国を見るな」と主張する。

そして、最大の障害は尖閣問題だが、これは解決不能の問題だから、棚上げ状態を続けるしかない、防衛バランスを崩さないよう、然るべき防衛力は維持していくことは必要、との考えで、同感である。

理性ではわかるが、感情的には、中華思想や、尖閣、南沙諸島における横暴、少数民族弾圧にはやはり嫌悪感を禁じえない。

## ③ ネオ・チャイナ

E・オズノス 白水社

中国に留学し、特派員として駐在した経験もあるジャーナリストが現代中国のうらおもてを書いており、全米図書賞受賞。ピューリッツァー賞最終候補。とにかく面白い。

熱烈な共産党支持者も、反体制派もインタビュしてよく話を聞いている。そして

「距離を置いて眺めると、中国はさらなる発展に向って否応なく前進しているかのように見える。しかし中国の内側にいると、人々がより慎重な姿勢を示していることがわかる。これまで中国が手にしてきたものは、鉄と汗と火によってもたらされたが、それが永遠に続くものではないことを彼ら自身が誰よりもよく理解している。」

いま、金持ちランキングの上位を中国人が占め、億万長者の数は世界一というが、貧民の所得は、アフリカ諸国並という凄まじい所得格差がある。新たな流血革命は起きないか。また、国民の多くが「カネが全てではない。」となった時、力による情報統制、言論封じ込めがいつまで続くのか、興味深い。

中島 茂

## ① 「維新の肖像」

安部龍太郎著(潮出版社)

## ② 最後の「日本人」—朝河貫一の生涯—

阿部善雄著 (岩波書店)

「維新の肖像」、この題に惹かれて①の書を読み始めた。

物語の主人公朝河貫一が、その父正澄を主人公とした戊辰戦争の二本松の戦いを描く一方、アメリカ在住の自身の生き方を併記する形で話は進められていく。

その過程で、朝河は戊辰戦争が薩長を主力とした新政府軍の「没義道」の戦いであったと考えるに至った。

戊辰戦争のさ中、賊軍とされた二本松藩士の一人は叫ぶ。「あやつらの非道・不正・悪辣をこのまま許せば正義の魂は消え失せ、力のある者のみが自由に国民をあやつる歪んだ国になるのは必定」

全国を鎮撫した新政府は天皇の御名の下に警察と官僚を掌握し、「五箇条の御誓文」の理想とかけはなれた国家体制を築き、日清・日露の戦争に勝利をおさめた。

後の満州事変や上海事変をひきおこし、ついに日中戦争・太平洋戦争へと突き進む遠因は戊辰戦争の中にあつたと朝河は考える。

①の書を読み了えて、私は②の書を久しぶりに再読する必要を感じた。

②の書は三十年以上も前に出版されたが、日本人歴史家による最初の本格的な朝河貫一伝であり、稀代の比較法制史家の生涯と業績を二つの側面から克明に描き出している。

一つは朝河の学問上の業績である。

朝河は日本の中世封建制の特色を九州に残された「入来文書」を手がかりに解明し、これを西欧封建制の特色と比較検討した。

彼は日本の中世文書を、中世の格調高い英文体に翻訳し、さらに日本の封建社会とヨーロッパ封建社会との相違を訳註によって示した。

それは日本社会の発達を、人類社会の発達のなかに克明に位置づけることをめざしたものである。

日本史研究家のライシャワーや英国の外交官であり日本史家であつたジョージ・サンソムが、日本の封建制度研究の出発点を「入来文書」においたことから、朝河の業績の大きさがわかる。

もう一つの側面は、満州事変以後の日本の「没義道」な大陸進出が招いた日米衝突の危

険を憂慮し、回避をめざした精力的な活動である。

アメリカ在住の比較法制史家として世界的な名声を博していた朝河は、内外の知識人に多くの知己や共鳴者をもっていた。

その一人で米国史・米国憲法の権威者である高木八尺は、一九三一年末の朝河への手紙の中で次のように述べている。

「……其の歴史の背景に真のインディヴィデュアリズムの鍛錬を有せざる国民は **organized minority** の組織的な努力の前になぎ倒されて、完全に与論を支配さるるの憾を免れず候……」

一九四〇年九月には朝河が最も恐れていた日独伊の三国同盟が締結され、日米の対立は決定的となった。

独善的で狭隘な日本の指導者たちの愛国心と、異国に在任しつつ、祖国の進路を憂え、苦悩し、忠告を続けた学究の愛国心との間には天地ほどの断層が存在したのである。

ここで①の書に戻ろう。

著者は末尾で主人公朝河貫一に託して語る。「明治維新は功罪半ばする革命である。奥羽諸藩はその罪の犠牲になつたが、国家的な規模で見れば功の部分も多い。その最大のものが五箇条の御誓文にうたわれた清新な思想である。だが※この事件がそうした思想を抹

殺し、国民を独善と狂気に駆り立てるきつかけとなるだろう。そうして軍部による独裁化が進み、いつその戦争拡大をもたらす。」

※五・一五事件をさす。

大きく重いテーマを掲げながらも、読者を作品に引き込んでいく作者のストーリー構成の妙と筆力はすばらしい。

ひるがえってわが国の現状をみると、政府・与党の内部で異論を容れない空気が強まりつつある一方、日本の昭和期のアジア侵略の歴史を糊塗するような動きさえある。

朝河貫一の生涯と業績はいまこそ新たに顧みられる必要があるのではないだろうか。

二つの書を読み了えて、デモクラシーはインディヴィデュアリズムとリベラリズムの支えなくしてはあり得ないことを改めて感じさせられる。

(友の会)

## 文学同人誌『槓』連載

「ここはジパング」岸本静江

新井 宏

小説を読まなくなつてから、かれこれ三十年になる。しかし、近年、何かと同人誌や自費出版本を頂戴する機会が多く、感想文を書

く都合からいくつかの小説も精読した。正直に言えば、読むのが苦痛な作品もあったが、中には歴史小説としてはつととするような刺激を受けた作品もある。

その中のひとつに文学同人誌『槓』に連載中の「ここはジパング」がある。

一六〇九年(慶長一四年)、フィリピン臨時総督の任を終え、マニラからメキシコへ向けての航海中台風に遭い、千葉県御宿町の浜に漂着したドン・ロドリコの物語である。

作者の岸本静江さんは、千葉県習志野市出身、東京外国語大学スペイン語科を卒業して、NHK国際局でスペイン語放送に従事し、時事通信社にも勤務。陶芸家・岸本恭一と結婚し、一時期家族と共にメキシコに在住したこともある。

ご存知のように史遊会には「天正少年使節団」や「慶長遣欧使節」についての第一級の研究者の高橋由貴彦さんがいたし、「隠れキリシタン」の研究者であり、近年は『まんじ』に長編小説「高山右近」を連載している鍋屋次郎さんもいた。おふたりともスペインやマニラを舞台とする歴史を詳細に紹介している。その上、私の「金属を通して歴史を観る」の主要テーマのひとつ「銀による戦国バブル」はまさにこの時期のマニラを中心として展開されていた。

だからドン・ロドリコについても強い関心があり、わざわざ御宿まで出かけたこともある。そこで得た情報は、ドン・ロドリコ乗船の遭難者の内三一七名を助けた村民達の善意の行為であった。ロドリゴは、暴行や略奪を警戒したが、村人たちは進んで海に飛び込み、乗組員たちを助け、衣服や食料を与え、海女は自分の肌で凍えた乗組員たちを温めたともいう。このアジアの辺境の地に、まさかこのように献身的な、このような無償の行動をする人々がいるとは思っていなかった。

ところが大喜藩の重役たちは、異国人を受け入れて問題が起るのを嫌い、即刻切り捨てるべしという結論を出したらしい。しかし幸いなことに、大喜多藩の藩主本多忠朝は、当時の老中本多忠勝の次男であり、徳川家康がスペインとの交易を渴望していたことを承知していた。

かくしてドン・ロドリゴ一行は厚遇され、江戸で秀忠に会い、駿府で家康とも会い、次いで大阪を経て九州豊後でサンタ・アナ号を点検する。ドン・ロドリゴは主艦サン・フランシスコ号(千トンの他に、随行戦艦二隻を率いていたが、その内のサンタ・アナ号が豊後に漂着していたのであるが、遠洋航海に耐えないことを確認したロドリゴは、江戸に引き返した。そしてウィリアム・アダムスの

建造したガレオン船(安針丸)の提供を受け、一年ぶりにメキシコに向けて出港した。

おそらく、そのような経緯に間違いはないだろうが、気がかりだったのは、ドン・ロドリゴがなぜ房総沖で遭難したかである。岸本さんによるとドン・ロドリゴは、臨時総督の任にあつた時から、日本との交易に関心が高く、倭寇の暴徒を日本に送還したり、徳川家康の外交顧問だったウイリアム・アダムスと会見し、家康に友好的な書簡を送ったりしていた。

そのために、ドン・ロドリゴはメキシコへの帰任のコースを通常の台湾の東方沖航路を取らず、大陸に沿って流れる黒潮に乗って北上し、日本の沖合を進む航路を取ったのだという。スペイン語に堪能な岸本さんは、本書の中でも、天正少年使節に始まり、スペイン無敵艦隊や、当時のメキシコやマニラの状況をスペイン側の資料も渉猟して詳細に語っているのです、その説は極めて説得力がある。

ドン・ロドリゴは当時の西国大名との交易から、江戸での直接交易を狙い、意図的に日本を北上していたのである。

その頃の日本は、関ヶ原後とは云っても徳川の直接支配地は四分の一にすぎず、スペインやポルトガルからみれば、江戸幕府さえ関東の地方政権に過ぎず、西国大名との交易を

通じて、江戸幕府に揺さぶりをかけるとか、江戸と直接結んで交易を拡大するとかの機会を狙っていた。逆に江戸幕府側から云えば、何とか貿易権益を全て手中に収めて、西国大名を押さえ込むと同時に、銀の新精錬技術アマルガム法をメキシコから導入することを渴望していた。

そもそも岸本静江さんが私に接触してきたのは、銀アマルガム法についての問合せがきっかけだったのである。

### 忘年会のご案内

既にご案内通り、今年の忘年会は左記住所の高級カラオケ店の「コート・ダジュール・銀座コリドー店」で開催します。今回は幹事の独断で、参加費は**全員無料**にして、多くの方のご参加を得たいと思っています。

#### 開催要領

○ 日時 十二月九日(水)

一七時三〇分〜二〇時

○ 場所 「コート・ダジュール・銀座コリドー店」

中央区銀座七丁目二の二二

○ 一〇二〇―三七五―六八八

地下鉄「銀座」駅徒歩三分

○ 趣向  
JR「新橋」駅六分、  
JR「有楽町」駅八分  
一時間半程度歓談、その後一時間程度カラオケ大会 以上

